

福井に残る天狗党の乱のあと

旧京藤甚五郎家住宅

南越前町今庄



京藤甚五郎家は北国街道今庄宿で古くから酒造業を営んでいた旧家で、家は標準的な町屋の約2倍という大きさでした。

天狗党一行は木ノ芽峠を越える手前でここに宿泊しており、家の中には天狗党がつけたとされる刀疵も残っています。これは喧嘩や追討軍との戦闘ではなく、久しぶりの酒で上機嫌になってつけた疵といわれています。(県指定有形文化財)

新保陣屋

敦賀市新保



木ノ芽峠を越えた天狗党一行は新保に陣を置き、次の葉原に陣を置いて待ち構えていた加賀藩と対峙しました。

一行は戦闘を避けようとしてここで加賀藩と交渉を重ねましたが、追討軍の姿勢は厳しく、状況を変えることはできませんでした。攘夷の志だけでも伝えようと食いがりますが、これも聞き入れられず、ついに降伏することを決意しました。

練蔵

敦賀市松原神社境内



追討軍に降伏した天狗党一行は初め加賀藩に預けられ、丁重な扱いを受けていました。しかし、加賀藩から幕府に引き渡されると扱いは一変し、この練蔵に詰め込まれることになりました。

当時、蔵は全16棟で、現在地から北東のより海に近い場所に並んでいました。そこから1棟が松原神社境内に、1棟が水戸市回天神社境内に移築されて現存しています。

准藩士屋敷跡

三方郡美浜町佐柿



天狗党一行823名の内、約135名は遠島に処せられました。加賀藩から幕府に引き渡された後、加賀藩を始めとする複数の藩から寛刑を求める声が上がっていました。耕雲齋らの処刑を止めることはできませんでしたが、遠島の約135名は刑を許されて小浜藩預けとなりました。

小浜藩は一行に金子や屋敷を与えて迎え入れ、身分も浪士ではなく准藩士としました。

武田耕雲齋等の墓と武田耕雲齋像

敦賀市松島



罪人として処分された天狗党一行でしたが、乱からわずか3年後に大政奉還・王政復古があり、社会の大変革が始まりました。

以後、一行の扱いも一変し、公に顕彰が進められるようになりました。

この墓と像と向かい合わせとなっている松原神社は武田耕雲齋以下411名を祭神としてまつています。(国指定史跡)

共催館 敦賀市立博物館

敦賀市相生町



旧大和田銀行本店(県指定文化財)を活用した敦賀市の歴史博物館です。

敦賀ゆかりの歴史や民俗、美術、そして港湾などに関する資料を収蔵、展示しています。

※現在は建物修復工事のため閉館中で、来年7月頃にリニューアル開館予定です。

平成26年度福井県文書館企画展示リーフレット

平成26年8月29日発行 編集・発行/福井県文書館



福井県文書館
〒918-8113 福井市下馬町 51-11
TEL 0776-33-8890
FAX 0776-33-8891
E-mail bunshokan@pref.fukui.lg.jp



福井県文書館企画展示・敦賀市立博物館共催
蜂起150年

水戸天狗党 敦賀に散る

平成26年 8月29日|金| → 10月22日|水|

福井県文書館閲覧室 開館時間 9:00~17:00 入館無料

■展示説明会 9月7日[日] 11:00~14:00~

■文学館開設イベント 朗読会 吉村昭『天狗争乱』 9月23日[火・祝]14:00~
朗読者 福井商業高校・北陸高校放送部のみなさん 県立図書館多目的ホール

■関連企画 気比史学会 敦賀市民歴史講座 10月4日[土]14:00~

講師 岩立将史氏(東京工業高等専門学校非常勤講師) 敦賀市立図書館3F

(上)「水戸浪士騒動図」敦賀市立博物館蔵
(下)「配陣図」松田三左衛門家文書 福井県文書館蔵



福井県文書館 FUKUI PREFECTURAL ARCHIVES

918-8113 福井市下馬町 51-11 TEL 0776-33-8890 FAX 0776-33-8891 http://www.library-archives.pref.fukui.jp bunshokan@pref.fukui.lg.jp



水戸浪士勢の西上行程(『図説 福井県史』(福井県 1998年)より)



水戸浪士勢の越前国内行程と諸藩包囲網(同上)



筆叢拾遺

松平文庫 福井県立図書館保管 A0143-00544~00547

令達・書状・風説書等が収められた雑記です。4冊から成り、その内の2冊に天狗党の乱の記述があります。

2冊の内1冊は「常野脱走一件」と題されており、天狗党の乱に関する書状や覚書がまとめられています。

もう1冊は福井藩の探索方が集めた諸方の人物の動向をはじめ、長州征討や生麦事件、そして天狗党の乱などの事件に関する情報が記されています。探索方の一人、山本龍次郎(関義臣)は後に海援隊に入り、維新後は知事や議員を歴任しています。

なぜ天狗?

天狗といえば赤い顔と高い鼻。

天狗党は下級武士が多かったことから天狗党の天狗は「天狗になる」という比喩表現で、対立していた諸生党による蔑称が始まりであったとされています。



水戸から京都へ 日本を横断

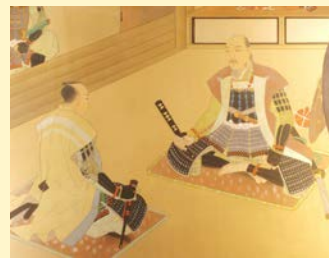
9代水戸藩主徳川斉昭が藩政改革を目指して広く人材登用を進めた結果、水戸藩では斉昭に重用された改革派(天狗党)と藩政の中心から遠ざけられた保守派(後の諸生党)との間で対立が生まれ、内憂外患の拡大とともに対立も激化していきました。そして1860年(万延元)に斉昭が死去すると、両派の対立はますます深刻になりました。



武田耕雲斎立像 敦賀市立博物館蔵

この間に改革派の中から尊王攘夷を強硬に主張する一派が生まれ、1864年(元治元)3月、ついに同派の首領格藤田小四郎(尊王攘夷思想に影響を与えた水戸藩士藤田東湖の子)が、国政上の課題でもあった横浜港鎖港を実現しようと筑波山で挙兵しました。この時の動きは関東に止まり、目的を果たす前に鎮圧されましたが、同年11月1日、大子村で改革派の家老武田耕雲斎を将に立てて再び挙兵し、同じく横浜港鎖港を主張していた禁裏御守衛総督一橋慶喜(斉昭の子)を頼って西上を開始しました。

一行は幕府から「浮浪之徒」と呼ばれて先々で諸

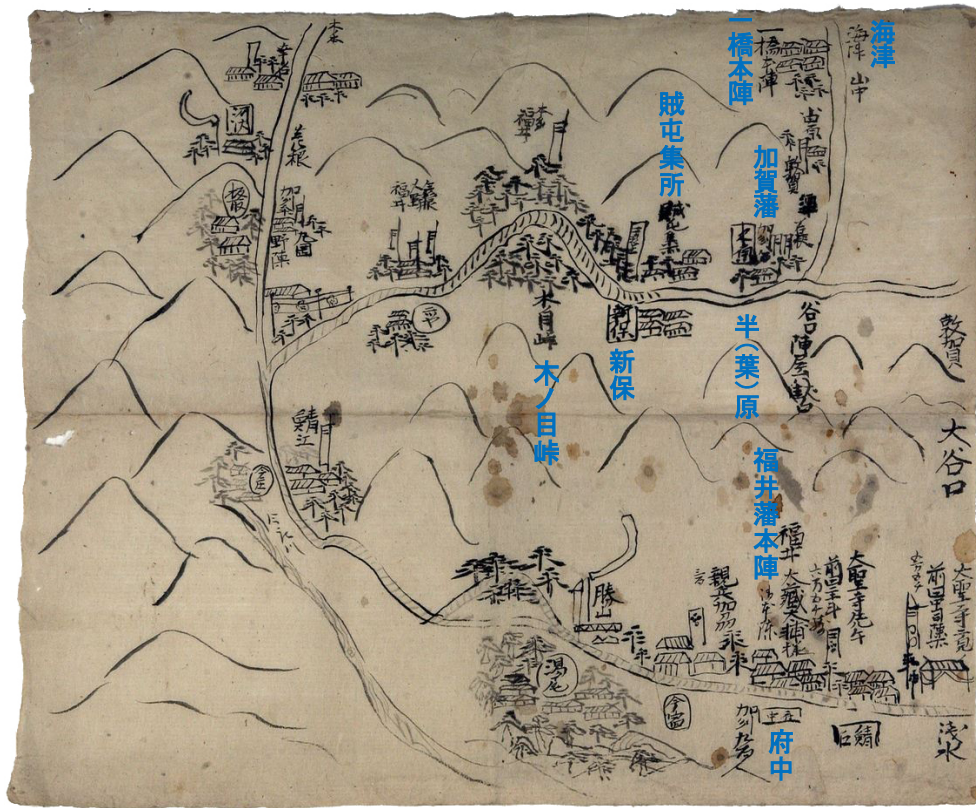


武田耕雲斎・永原甚七郎対談図 敦賀市蔵

藩に行く手を阻まれながら京都を目指して西上を続けました。そして美濃国から尾張国へ入る手前で進路を北に変え、同年12月4日、蠅帽子峠を越えて越前国に入りました。

しかし頼みの綱の慶喜が追討軍の総大将であることがわかり、包囲の環が迫って行く手もふさがれたため、追討軍による総攻撃直前の12月17日、天狗党823名はやむなく降伏の道を選びました。

降伏した823名は初め加賀藩に預けられ、丁寧な扱いを受けましたが、幕府に引き渡された後は肥料となる鯨粕を貯蔵する鯨蔵に送られ、罪人の扱いを受けることになりました。その内353名は形式的な取り調べを受けて斬罪となり、1865年(慶応元)2月、来迎寺境内で刑に処せられました。残る約470名も遠島・追放・水戸渡し・寺預け・江戸送りとなり、水戸で始まった天狗党の乱は、北国街道の難所木ノ芽峠を越えて敦賀に入ったところで終息しました。



配陣図

年未詳 松田三左衛門家文書 福井県文書館蔵 A0169-03415

松田三左衛門家に残されていた天狗党の乱の配陣図です。天狗党一行は既に木ノ芽峠を越えて新保に入っており、その眼前には加賀藩勢が見えます。12月11日から17日までの間の各陣の配置が描かれているようです。

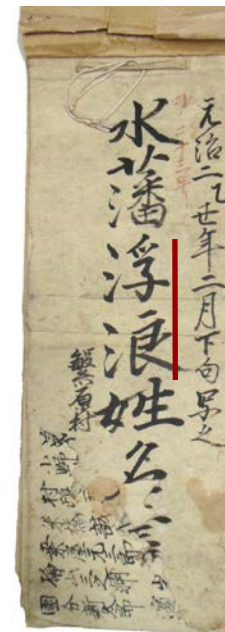
天狗党の行程上には、幕府領ながら天狗党を友好的に迎え入れた村もあれば、門戸を閉じたり山小屋にこもるなどしてやり過ごそうとした村、中には天狗党対策として藩によって焼き払われたという村もありました。

松田三左衛門家は越前海岸東北部、越前岬と三国のほぼ中間にあった南菅生浦で庄屋を務めていました。

地理的には天狗党一行の行路から離れていましたが、領主であった福井藩松平家が動員されたこともあってか、情報を収集しながら動静を注視していたようです。

水藩浮浪姓名簿

1865年(元治2)2月 敦賀郷土博物館蔵 M0006-00382

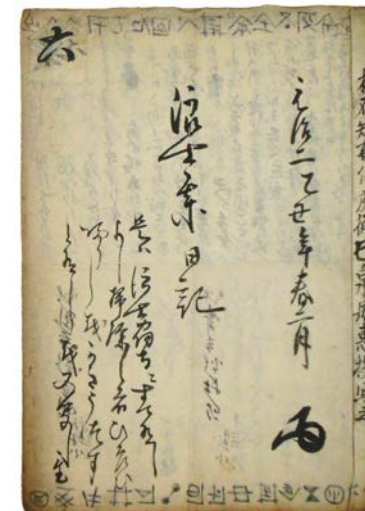


攘夷の旗を掲げて京都を目指した天狗党一行でしたが、その志は認められず、幕府からは「浮浪之徒」と呼ばれていました。

事実、西上前は近隣の村々に被害を及ぼすこともありましたが、西上後は厳しい軍律を定めて先々の村で乱暴を働くことを戒めていました。そのため「浪士」や「烈士」という呼称も散見され、維新後はさらに肯定的な「正士」という呼称も使われるようになりました。

天狗党の日記

敦賀郷土博物館蔵 M0006-00379, 380, 612



天狗党一行は写本を含めて複数の日記を残しています。それらの日記を見ていくと、西上前の関東での戦闘から西上後の降伏まで、当事者の視点を通して天狗党の乱の推移をたどることができます。

中には一行が宿泊した寺に捨ててあり、それを拾った掃除の者によって書き写されたという日記もあります。

近代化への模索



1853年(嘉永6)、幕藩体制が行き詰まりを見せ始めていた中でペリー艦隊が浦賀に来航し、日本は外国との技術力の差を目の当たりにしました。

以後、幕府が諸外国との関係構築を模索する中で朝廷の権威が上昇し、御三家や親藩、外様大名の発言力も高まって朝・幕・藩関係が少しずつ変化を見せ始めました。

また、それまで政治に携わることのできなかつた下級武士、さらには町人や百姓までもが危機意識をもって動き始めるようになりました。

朝廷、幕府、諸藩、それも上下や身分に関わらず、日本を挙げて国の行く末を案じていた幕末、そのような中で起きた天狗党の乱にも多数の町人・百姓が参加していました。